

2014年度卒業論文紹介

原口 愛理

ドイツ語聖書における翻訳技法 ——分詞の観点からの考察——

小学校から高校までの12年間キリスト教に携わっていた筆者にとって、聖書とは身近なものであった。大学では、語学を使ってこの経験を生かしたいと思い、「聖書の翻訳」をテーマにこの卒業論文を書くに至った。

論文の方針を述べると、まず「原典に忠実な訳」という視点から、それぞれのドイツ語聖書の翻訳技法や、ドイツ語へ訳す際の法則性などを明らかにしていった。原典であるギリシャ語の構造は、当然ながらドイツ語の構造と異なる。つまりギリシャ語の分詞は、ドイツ語の文としてそのまま分詞で訳すのが「難しい」ということだ。翻訳について考察する上で、これは非常に重要な点である。同じ文法構造のまま訳すのか、それともドイツ語らしく訳すのか。本当の意味で「忠実である翻訳」というのはどのようなものなのか。

考察の対象とした聖書の物語は、新約聖書において重要な場面である「ラザロの復活」である。「ラザロの復活」とは、新約聖書のヨハネによる福音書11章1—44節の物語である。あらすじを説明しておく。友であるラザロが病気と聞いてイエスは、ベタニア¹へ行くが、すでにラザロは4日前に死んでいた。しかし、イエスがラザロの墓の前で彼を呼ぶと、ラザロは生き返って墓から出てくる。これを見たユダヤ人達はイエスを信じるが、イエスのことを良く思わない何人かは、彼を殺す計画を立て始める。そしてこの後、イエスは十字架に架けられて亡くなるが、

1 物語の舞台であるベタニアは、ラザロ、マリア、マルタ兄弟が住んでいた場所。

3日後に復活する²。

比較の対象となるドイツ語聖書（計10冊）を以下にあげておく。統一訳、1545年 Luther 聖書、1984年 Luther 聖書、Elberfeld 聖書、Menge 訳、Zink 訳、Zürich 聖書、Gute Nachricht、Brunns 訳、Herder 版。

さてギリシャ語の分詞をどう訳すかが、翻訳のひとつのポイントになる。そこで分詞に注目して、どのようにドイツ語に翻訳されているかを見ていく。ただし、分詞だけではなく、分詞を含む文も考察の対象にする。また、分詞の訳し方を対照表にまとめていく。

論文の第4章においては、ドイツ語と同じゲルマン語に属する英語訳の『ラザロの復活』についても見ていく。使用する聖書は、„THE HORY BIBLE; Revised standard version“である。1冊だけであるが、英語訳のだいたいの特徴をうかがうことができるであろう。

結果として、『ラザロの復活』のドイツ語訳では、ドイツ語の分詞はほとんど見られなかった。もちろんドイツ語でも分詞として訳すことは不可能ではないが、ギリシャ語の分詞がそのままドイツ語でも分詞として訳されていることはあまりないと言ってよい。したがって、原文の構造と全く同じという意味での「原典に忠実な訳」は、少ないように思える。

しかしながら英語訳では、かなり多くの箇所で見つかった。そこで現在分詞に注目してみると、10冊のドイツ語訳聖書では、のべ4箇所見つかった。それに対して1冊の英語訳聖書では、現在分詞で訳されているのが8箇所もあり、英訳とドイツ語訳の大きな相違が見られる。

しかし、ドイツ語においても分詞を用いて訳すことが不可能というわけではない³。一般的に言って、現在分詞を用いる表現がドイツ語よりも英語の方がより多い（より自然である）ことが、上の相違になって表れていると思われる。

2 したがって、この『ラザロの復活』の奇跡は、イエスの復活の予兆とも解釈されている。

3 例えば、副文 Als ich dies hörte, weinte ich. (これを聞いたとき、私は泣いた) を分詞で言い換えると、Dies hörend, weinte ich. (これを聞いて、私は泣いた) となる。このように、分詞を用いて訳すことも必ずしも不可能ではないのである。

分詞の時制に関しては、例えば正確に過去完了などで訳される場合もあるが、必ずしも正確に訳されているというわけではない。もし正確に訳すとすると、かなり煩雑で、ドイツ語らしさを失ってしまうからであろう。文字通り「原文に忠実である翻訳」よりも、「ドイツ語らしい翻訳」を選んだのである。

原 麗奈

ワルシャワ・ゲットーの日常 ——生活から見た抵抗運動——

ワルシャワ・ゲットーはポーランドにおけるユダヤ人たちが隔離居住地として住まわされていた地区のことである。ナチスドイツが犯した罪、ホロコーストを理解する上で被害が大きかったワルシャワ・ゲットーを無視することはできない。

この論文を書いたきっかけは、ドイツのゲッティンゲンでクラウス・ベルク演出の「死の舞踏、ワルシャワ・ゲットーのレヴュー」„*Danse macabre —eine Revue aus dem Warschauer Ghetto*“を観たことである。劇中、風刺という形でナチスを批判する俳優たちに行える最大の反抗が見られる。この論文では政治、食、娯楽の3点に着目してワルシャワ・ゲットー内でユダヤ人たちがどのような環境の中、自分たちの生活を構築し、抑圧された日常を生き抜いていったのか、どのように抗していたのかを明らかにしている。

ワルシャワ・ゲットーが建設されたのは1940年10月2日である。この中におよそ50万人のユダヤ人が暮らしていた。ゲットーの中は常に過密状態だったのである。しかしその中でもワルシャワ・ゲットーはあたかもひとつの国家として機能していた。国家機関としてユダヤ人評議会が存在する一方で、ブントなどのユダヤ人政党の多くが地下の抵抗活動を行っていた。

ゲットーのユダヤ人たちが直面したもっとも切実な問題は恒常的な食糧不足であった。住民たちは食料を確保するために闇取引を行っていたが、子供たちの担った役割も見逃すことができない。ゲットー内で歌わ

れていた歌の歌詞が示すように、彼らは自分たちの家族を救うため命をかけて食料を調達していた。その他多くのユダヤ人組織がアメリカのユダヤ人組織の援助を受け福祉的なサービスを提供していた。つまりユダヤ人たちはゲットー内で同胞のため助け合う相互扶助のシステムを構築したのである。彼らは死と隣り合わせの状態でも生きることを諦めていなかった。

ナチスに支配された中でも娯楽が存在していた。ゲットーの中では多くの音楽を聞くことができたが、それらは心の癒しとしての音楽とナチスにより強要された音楽の2種類であった。他にも物乞いによる音楽もあった。音楽の他に演劇やコンサートも多く開催されていた。ゲットーという非日常の世界の娯楽の裏にはユダヤ人のナチスへの抵抗が隠されている。つまり彼らにとって娯楽とは極限状態の中での精神の崩壊を防ぎ、ナチスの支配に対抗するための精神的抵抗であったのである。

1942年7月、ユダヤ人の絶滅収容所への移送が始まり、第1回目の移送だけで、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人の約75パーセントが殺されていった。そのような圧倒的なナチスの支配に対しても立ち向かうユダヤ人たちがいた。彼らは戦闘組織をつくりナチスと戦ったのである。歴史的な事件である「ワルシャワ・ゲットー蜂起」で、最終的に生き残ることができたのは10人のみであったが、生き残ってゲットーから脱出することができたユダヤ人たちはその後も地下の抵抗運動に身を投じていくこととなる。彼らの抵抗は単に死を逃れるための抵抗ではなかったのではないだろうか。彼らは死ぬことを恐れていなかった。むしろ自分たちが生きた証を残すために戦い続けていたのだろう。

ホロコーストの被害者としてのユダヤ人のイメージは多くの人にとってステレオタイプ化され固定化されている。しかし、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人たちはただナチスに支配され、支配者の思いのままに殺されていったのではない。この論文で扱ったユダヤ人たちは抵抗することで自分たちの生を示そうとしていた。ゲットーで暮らしていたユダヤ人たち、すなわち乏しい食料の中でも命懸けで闇取引をして家族を守ろうとしていた子どもたち、歌を歌ってはナチスに抵抗していたおどけ者、演劇に風刺を折り混ぜて抵抗していた俳優たち、最後まで戦うことを諦めなかった戦士たち、彼らの存在を忘れてはいけない。ユダヤ人はただ

2014年度卒業論文紹介

の弱い受身の民族ではない。むしろそのような境地でも生きていく、抵抗することができる芯から強い民族なのである。これらのことを知ってはじめてホロコーストを理解したと言えるであろう。ホロコーストという事実から目を背けないこと、そして2度と同じ過ちを犯さないことが私たちにできる唯一の彼らへの償いではないだろうか。